

琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] 研究と普及：新たなシステムの構築を

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲盛, 広明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015688

研究と普及：新たなシステムの構築を

仲 盛 広 明



Research and extension service for agriculture : Create the new system.

「日本の農業を取り巻く環境は厳しい」という言葉を、過去30年以上耳にたこができるほど聞かされてきた。第2次沖縄県農林水産業振興計画にも計画策定の趣旨と性格の中で、「本県の農林水産業を取り巻く環境は、・・・・今なお多くの課題を抱えており、依然として厳しいものがある」と述べられている。社会的・経済的な環境変化の速度に農業が追いつかないことへの関係者の悲鳴であろう。

就職したころ職場の先輩たちから「作物は、作る人の足音を聞いて育つ」とよく言われた。「試験作物の状態を毎日観察しその反応を注意深く観よ」ということであろう。東京農業大学学長を務めた横井時敬は、農業の理論と実践の乖離を憂いて「農学栄えて、農業亡びる」という言葉で警告したことは有名であるが、また同氏は「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」との辞をも残した。先輩たちの辞と相通ずるものがある。横井時敬の多くの格言は、現在でも東京農大の精神となって受け継がれている。しかし、本来は「農学栄えて、農業栄える」が筋でなくてはならない。

農業現場における農業技術は、これまでは父親の実践している姿を息子が観て経験することにより受け継がれてきたように思われる。しかし、現代では農作業の手伝い経験をする事なく、卒業後に親元を離れ農業以外の仕事に就職し、ある程度努めた後に帰省し、農業をゼロからスタートするというスタイルが多数を占めるような時勢になった。農業生産を支える技術力とは、基本的な作業の知識や技能の水準といったものであろう。「果たして農業現場における技術力は向上しているのか？」はなはだ心配になる。

2001年には国立農業研究機関が独立行政法人化され、2004年には国立大学が独立行政法人化されるなどの大転換が行われた。どうしたら独法や試験研究機関の成果を早く現場に普及させることができるのか。研究、実用化の実証、普及という段階的なシステムを根本から変える必要がある。現在のシステムでは研究から成果の普及までに時間がかかりすぎる。そもそも研究成果について研究サイドが思うほど普及サイドが評価しないケースが多々ある。

この壁を乗り越えるには研究テーマの企画立案段階から研究と普及が一体となり、農業者も加えて協働でことにあたり、研究、実用化、普及までパートナーとしてやり遂げるシステムを構築することが必要である。無論、農林水産業振興計画を念頭において研究を推進することが重要であるので、行政と切り離して研究―普及のシステムを構築することはできない。なおその際、研究者のインセンティブを高めるため、現場に普及した成果については論文と同等に扱うなどの措置を講ずるなどの策が必要である。(沖縄県農業研究センター)